

八木健に学ぶ滑稽俳句 18

高橋 素子

のび盛り生意気盛り花盛り老い盛りとぞ言はせたきもの 築地正子

先日の「天声人語」で初めて耳にしたが、「健康寿命」なるものがあるという。男性 70 歳、女性 73 歳、日常生活を支障なく送れる平均年齢のことを言うらしい。男性の平均寿命も昨年初めて 80 歳を超えたということだから、健康寿命以後の介護や入院が必要な期間は長い。掲出の短歌は、豊かな自然や老いを題材に、潔癖で孤高な雰囲気を持つ築地正子の歌である。歌壇とは厳しく距離を置き、終世独身を通した彼女の老いてなお凜としたいきごみは素晴らしい。

どてら着て祖父の威厳をうけつげり 八木健

師・八木健の句は、祖父の形見のどてらを着て、「爺ちゃんはどうして威厳を張ったものよ」と、尊敬と羨望の眼差しで見っていた祖父の威厳を、受け継いだ様な気持になっている詠み手の姿が、可笑しくも哀しい。そして、師の父親のことを、生身魂と呼ばれる年齢になってしまったが、若気の至りとも言える武勇伝を語ってくれたのは、ついこの間の事の様に思えると、その落差を次の句に詠んでいる。

若い時はかなりのワルで生身魂 八木健

今回も古今の名句と師・八木健の句を比較して、滑稽句の学習を深めてゆきたい。

煌々と夏場所終りまた老ゆる

秋元不死男

暑いのがきらひな人に夏来る

八木健

現在は、本場所は年 6 回であるが、不死男が句を詠んだ頃は、東京・両国の国技館で行われる大相撲は、初場所と夏場所の 2 回興行であった。千秋楽の土俵を照明は煌々と照らし出し、若い力士の激突に会場の興奮は収まらず・・詠み手も観戦に感極まったが、その夏場所も終わってしまえば、却って一層虚しく感じられ、また年取ってしまった様に身にしみて感じられると、不死男は句に詠んでいる。

本来俳句は季語を賛美するものである。しかし実際に、熱い夏が嫌いな多くの人にも夏は来る。「それもひとつの季節感ですね。この様に、裏切りの構成からも滑稽句は生まれます」と、師匠は語る。

流燈のゆく紐といてゆくやうに

土肥あき子

灯籠のひとつは流れたくないか

八木健

7 月 16 日の夜、供養した先祖の霊の灯籠に火をともして、川や海に流す事を「灯籠流し」という。家族と精霊のしみじみとした別れが何ともいえない。だが、精霊のなかには、この世で親子や嫁姑の確執等いろいろあったものもあろう。土肥あき子は紐に例えて、魂のわだかまりが解けてゆく様に、灯籠の流れて行く様子を句に詠んでいる。

師匠は、草や石に引っかかって流れない灯籠を写生し擬人化。「久しぶ

りに里帰りをして、家族に歓待された精霊が帰りたくないのは当然だ」と、つぶやきをそのまま詠み滑稽句の佳句となった。

としよりやとつくりセーターまへうしろ 草間時彦

とつくりのセーター編む首っ丈 八木健

後ろ前にきてしまったとつくりのセーター。あらためて老いを自覚した時彦自嘲の句である。

師・八木健の句は、「首っ丈」という俗語を用いる事で、見事な滑稽句を形作っている。とつくりセーターを編んでいる彼女は彼に首っ丈であるとも読める一方で、セーターのとつくりの部分に必要な丈を編んでいるとも読めて面白い。

北風さん走りつかれてそよ風さん こうのふうか

風の兄弟長男が春一番 八木健

愛媛大学俳句大会で最高賞を取ったこの句の作者は当時、小学校一年生の女子であった。「びゅうびゅう吹く風を全力疾走していると思ったのが非科学的であり、それが詩なのです。句の中に幼い少女がいます。しかも、これまで誰もしたことがない表現です」と、師匠は語る。「多くの俳人が『俳句は見たままを描くもの』と勘違いをしています。俳句は『感じたまま』『思ったまま』を描くことが肝心なのです。誰もしたことのない表現は、感じたままを書くことで生まれるのです」と、続けられた。

師・八木健の句は、童心に返って春一番を擬人化・・・つまり、対象を凝視して同化。そのものになりきってみれば、春一番は人間でいう長男なのだ。「俳諧は三尺の童子にさせよ」との芭蕉の言葉通り、童心に返って滑稽句の佳句となっている。

厳といふ字寒といふ字を身にひたと 高浜虚子

蛙てふ文字蛙の字に潜む 八木健

両者共に漢字を用いた自在な洒落た句である。厳寒といえる真冬の厳しさの中に身を置いて、虚子は何ともお洒落な句を詠んでいる。漢字が厳寒の厳しさの効果を一層引き立てているのは素晴らしい。

同様に、蛙と蛙の漢字が酷似していることを発見。実際、土を重ねた中に蛙は潜み、蛙は田の土を重ねて作るものです。そこでこれを素直に句に詠めば面白い句になるのですと、師匠は笑った。